

## 府中の紫陽花

安藤 晃二

我が家から車で約二十分程の距離に「府中市郷土の森博物館」なる公園がある。江戸風、明治風の建造物や本館には、当時の事物の展示、プラネタリウムなどがあり、ちよつとした観光施設だ。その起伏のある 20ha 程の広大な敷地の大部分が梅林である。梅の香に誘われ二三月には夫婦で梅見に出かける。その年中行事が、もう十年以上続いている。また、運転手としては、アクセルのひと踏みで、途中混雑もなく目的地に到達できる爽快感が堪えられない。

五月上旬、俳句会の兼題は「紫陽花」であった。あのドライフラワーの風景、梅見の府中の公園で見た枯れ木群は紫陽花に違いない。いま訪れてみると、森のいたるところに、実に多くの株が植えられている。その緑の美しさは際立っていたが、咲き初めたばかりの花は全て浅黄色一色で、成熟には程遠い。俳句では季節感覚を先取りする傾向があるのだ。句会を翌日に控えた五月末、再び府中へ。「待ったなし」の句作の切迫感を背負う、その時の紫陽花は、「得も言われぬ」深い趣を味合わせてくれた。花は皆しつかりしているが、その色は未完成で、夫々が目指す彩りを萼や花弁に僅かにあしらいながらも、観る者の心は落ち着かない。「七変化」の面目躍如と云うべきか。

その時は句作表現に行き詰まった儘、三週間後に、三たび紫陽花の苑を訪れる。溢れかえる駐車場が物語る最盛期の日曜日、運動場サイズの芝生を取り囲み、白アジサイ一種のみ、柔らかい真円を想わせる無数の純白の毬が大群落を成していた。森に沿って咲きながら、場所によって天に向かってせり上がるように見える、不思議な光景に引き付けられ、近寄ってみる。折しも、巨木を成す何本かの山法師の純白の花が満開状態で、白アジサイと混然一体となつて素晴らしい景色を作っていたのだ。

### 山法師の白アジサイになだれ込み

府中の森に、「造物主」の手になる純白一筋の紫陽花が輝き、その見事な庭造りの演出を助ける人々の感性があつた。(令和五年七月十三日)